When, Where and How? Influenza Pandemic：スペシャリストが考える近未来
司会のことば

[1]防衛医科大学校　内科学（感染症・呼吸器）、[2]東京大学医学部 附属病院 感染症内科

川名 明彦[1]、畠山　修司[2]

2009 年春、北米よりいわゆる新型インフルエンザ（パンデミック（H1N1）2009）が出現し、パンデミックとなった。それから 3 年以上が経過し、このウイルス株は季節性インフルエンザとしてヒトの世界にほぼ定着した。過去においてもインフルエンザのパンデミックは幾度となく発生しているが、2009 年のパンデミックは、人類が本格的に「準備をして」迎えた最初のパンデミックといえよう。世界の多くの国々もわが国も、何年も前からパンデミック準備計画を策定し、パンデミック株を予測し、監視をし、備蓄や啓発を行ってきた。2009 年に実際に発生したパンデミックは、多くの点で想定と異なるものであったが、それまでの準備は被害の軽減に一定の貢献をしたと考えられる。しかし様々な課題も浮き彫りとなった。インフルエンザのパンデミックは、今後も繰り返し出現すると考えられるため、2009 年の経験を十分に検証し、今後の対策をより良いものにする必要がある。このために、今検討すべきことを 3 点挙げたい。　第一は、インフルエンザパンデミックに向けて 2009 年以前から行われていた準備計画の総括と、実際に発生した流行の疫学的分析、そして次のパンデミックに向けた準備計画の検討である。　第二は、鳥類・哺乳類も含め、世界のインフルエンザの状況を分析し、次のパンデミック株の出現をいかに早く検出するかというウイルス学的問題である。この中には H5N1 の問題も含まれよう。第三は、臨床的問題である。パンデミック時のインフルエンザの臨床像、抗インフルエンザウイルス薬や、ワクチンの使用などを概観し、今後の適正なインフルエンザ診療を検討しておく必要がある。　本シンポジウムでは、上記の 3 つのテーマに関連して、現在わが国を代表する専門家の先生方に御発表いただく機会を得た。最新の情報と考察を伺うことができると考える。また、最後に松本慶蔵先生からは、アジア風邪や香港風邪の経験も踏まえて全体を総括いただく予定である。　次のインフルエンザパンデミックは、いつ、どこから、どのようにして発生するのか、われわれはどう立ち向かえばよいのか。スペシャリストの考える近未来について伺うことを心より楽しみにしている。